



叔父の出征にあたり、川崎市の自宅前で撮影した1枚。この数年後、一家で満州に移住した。後列で日の丸を持つのが1歳の本人。右端が母。父は出征中で不在。

『手作りの教科書』

杉江ヨシエ

私が3歳のとき、戦地から帰った父が日立製作所所員として満州*で働くことになり、家族そろって満州の奉天に渡りました。暖かなベチカ。二重窓からは池とマロニエの並木が見え、街には広い道と華やかな商品が並ぶ大きなデパート。美しいところでした。90歳まで生きた母は、「満州時代が一番よかった」といっていました。

しかし、その幸せな生活は2年で終わりを迎えます。内地（日本）の情報がいち早く入る購買課で働く父が、「日本は戦争に負ける」といい、退職して内地に帰ることを決断。すしづめ状態の船で、途中、敵機にねらわれながらも無事内地にたどりつき、東京日野市に暮らしはじめました。

いよいよ東京も危ないと、今度は父の実家のある北海道へ引っ越し、そこで終戦を迎えました。「もう、これからずっと戦争がないからね」と父がいった時の情景は、今でも忘れることがありません。

あとになって、満州の遊び仲間は誰も助からなかったと聞かされました。父の機転と運のよさから生き延びられました。両親には今も感謝しています。

終戦の翌年、北海道の小学校に入学。十一月、父の

仕事の都合で神奈川県に引っ越しました。転校生に教科書はありません。母は毎日のように、近くの友達の家から教科書を借りて来て夜遅くまで書き写し、私のために教科書を手作りしてくれました。

食べ物は、コッペパンや、進駐軍の大きなバケツのような入れ物に入ったシチューみたいなもの。母と行列を作ってとりに行きました。家にはお風呂が無く、行水か、町田のお風呂屋さんまで電車に乗って出かけました。ある日ドラムカンが家に運びこまれ、板を敷き、五衛門風呂ができました。ささやかな日常生活を、少しずつ、何年もかかってとり戻していきました。

戦争は自然を破壊し、人々を殺し、世界を荒れはてた恐怖の世界に変えてしまいます。もう誰もそのような思いをしてほしくない。国立市在住の小学6年生の孫が、私の思いを受け止め標語にしてくれました。

目を背けずに、過去を受け止めよう

そこから始まる 私達の未来

*当時日本は中国東北部を占領し、「満州国（満州）」をつくっており、多くの日本人が暮らしていた。

2021年11月21日、日野市「多摩平の森ふれあい館」にて録音。現在82歳、日野市に暮らしています。

「音筆」で右をタッチすると、本人による朗読が聞けます。

